

一九六八年（掲載誌、発行元不明）

人間味過剰の教師か

知的マシンとしての教師か（2）

―人間性と知性の地盤―

矢口 新

昔陶工が陶器をつくるのに、何から何まで自分の労力を注ぎこんで仕事をした。土を掘る所からはじまって、使う道具や機械も自分の手でつくり、かまもつくり、燃料も自分で集めて、そうして土をねり、形をつくって、火にかけて陶器をやいた。そのすべてに彼の知力が働いて、彼の人間の味がそそがれる。そこから生まれた陶器に、彼の知性と人間的味わいがにじみ出るのである。

すぐれた作品を生み出す人は、それらの仕事のすべての部分にすぐれた労働をして、彼の知力と人間性を生かすことのできる人であろう。しかしすぐれた作品は、そういうように何から何まで自分でやらなければ生まれません。名人というものは、何でも自分一人で行う手工業者でなければならぬ。そうではあるまい。世の中のうつりかわりにつれて、陶工の仕事の仕方もかわらざるを

得なくなる。自分で土を掘る仕事はしなくてもよくなる。道具や機械をつくる人は別に出てくる。かまをつくったり、燃料を集めたりする人も別に出てくる。様々な人が参加してそれぞれ働いてくれる。そういうのは名人が名作を出すのに邪魔になるのである。うか。

確かにそういう情勢に反抗して依然として自分で何から何までやっている人もいる。そうしなければ自分の人間が生かされないという考え方なのである。しかし反対の人もいる。新しい情勢に応じて、新しい環境で、新しく自分の知力を出すことを工夫し、自分の人間的な味わいを出す努力をすることのできる人もいる。新しく専門の人によって掘られた土をいろいろ集めてそれをまぜることに新しい工夫をすることもできる。新しい専門の職人のつくった道具を使う工夫をする所に自分の人間的な味を出す人もいる。

何から何まで自分でやらなければ自分の知力を働かすことができないとか、人間の味を出すことができないということはない。人間の仕事はそんな単純なものではない。環境に応じて自分の働き方を無限にくりひろげられる所に人間の人間たる所があるのである。手工業の職人が、昔の社会的環境ですぐれた作品をつくったからといって、すぐれた作品は手工業でなければできないということではない。新しい仕事の組織で、分業というやり方の中で、すぐれた作品を出していくことができるのである。それは、そういう場で人間が場に応じて自分の知性の働かし方、人間的味わいの出し方を生み出すことができるからである。そういう人間の工夫によって、数少ない職人が、少数の人々にだけ奉仕する作品を作っていたのを、もっと大衆にすぐれた作品を提供することのできる状態をつくりあげてきたのである。そこには人間の人間としての働きを尊重する精神があったからである。いな

人間のもっている人間的能力の發揮がいつの時代でもすぐれたものを人間自身に還元してきたのである。このことは忘れてはならない。

しかしいつの時代でも人間は馬鹿な一面をもっている。人間を忘れて、人間の尊さを發揮させないように人間を位置づけるのである。ある人間が他の人をそういうようにすることもある。一人の人が自分で自分をそういうように考えこんでしまうということもある。要するに人間自身の自覚の低さなのである。現代にもそういう例は多々ある。すぐれて高度な技術を生み出し、組織を生み出したのも人間であるならば、その組織の中で働く所のまるで機械の一部のような人間をつくり出したのも人間自身なのである。社会主義であろうが、資本主義であろうが、人間を道具のように使うという使い方から脱却できないのである。

工場の中で機械のかわりをしている人間が生まれ、組織の中で自分を生かすことができないでいる人間も生まれてくる。そのように人を使う人間もいるし、人からそうさせられてなる人間もいる。そこに人間のあさましさがある。人間が環境に負けて人間としての力を發揮し得ないでいるのは人間に対する認識が足りないからであろう。人間はあらゆる環境で自己を生かすことのできる存在であることの自覚が不足しているのである。それが人間を人間として使わない状態を生み出し、また自己を人間的ならざる位置におく結果となるのでであろう。そこには長い歴史の中でつくられた機械論的な人間観がある。そのいうものから脱却することがこれからの課題となるであろう。

人間をいためつける人間自身の馬鹿さかげんを克服するには、人間性と知性とが常に鋭く働かなければならない。

二

人間を育てる役目をする教育者も昔は陶工のように何から何まで自分でやって、そういう場で知恵を働かし、人間性を働かしていた。そこにすばらしい作品としての人間を育てあげたこともある。

そういう時代においては、人を育てる仕事は聖なる仕事と考えられていたであろう。一人の教師が一人の人を育てる、そこに教師は全身全霊をささげる。それは陶工が作品に生命をうちこむ以上のものがあったであろう。聖なる仕事と考えられる根拠はそういう所にあるのである。

一人の教育聖職者に教育の仕事がまかせられる時代は、教育を受ける人間の数も限定されていた。極く少数の人が教育を受ければよい社会であった。またその教育を受ける人の側の要求の内容も限界があった。つまり一定内容の教育を与えればよかったのである。ある時代にはそれは剣であった。またある時代には詩歌管絃であった。現代のようにはあらゆる人が教育を受けるようになってくると、一人でそのあらゆることを教育することはできない。そこにはさまざまな組織が生まれてくる。こうして教育者の集団が生まれてくる。巨大な社会組織がつくられる。教育者ばかりでなく、その人の仕事を助けるさまざまな仕事をする人が生まれてくる。

そうなってくると、昔の教育聖職者が何から何まで自らととのえて教育するようなことではなくなってくる。そこでは新しい教育者が生まれてこなくてはならない。昔のように、何から何まで自分でやらなくては自分の人間の味わいや知性を働かすことができないと考えていたのでは、新しい時代の教育は成り立たなくなる。

自分で教科書をつくって教える所に自分をあらわすことができる
と考えれば人のつくった教科書で教えることは、自己を殺すことにな
るではないか。教育者はおのれの知性と人間性を働かす場がなくなっ
てしまうではないか。そう考えると、教育は聖職者ではなくなってい
まう。へたをすると、それは現代の大量生産システムの一つである流
れ作業の中で、たとえば電気器具をつくるハンダ付工のような機械的
な仕事をする事になりかねない。自らの意識が自らをそう位置づけ
てしまうのである。そうなると全く機械的な労働者ということになる
しかし果たしてそうであろうか。

昔、陶工は一人の人間がすべてをやるという環境の中ですぐれたも
のをつくった。そういう状態でなければすぐれたものがつくれなかつ
たのではない。新しい時代になって、新しい環境が生まれたら、新し
い陶工たちは、昔と全くちがった形で、すぐれたものを生み出したの
である。現代は昔と全くちがった形で、すぐれた作品が多く、陶工た
ちの協力によって生まれてきている。それは、異なった環境で、異な
ったものに対して異なった工夫をして、そこに自分の知性と人間味と
をそそぎこむ努力をする人間がいたからである。人間はそのように、
具体的場で、具体の物に対して、そこに人間性と知力を発揮すること
のできる存在なのである。

現代の教育者はもう昔のような聖職者にもどることは絶対にでき
ないであろう。教育者は昔の聖職者のように一人で何もかもやって人
間をつくる仕事をするのではない。巨大な社会組織の中でその一コマ
をうずめる人間なのである。だから教育者が労働者であるのはいいけ
いななどといっても、それは社会の組織がそういう状態をつくり出して
いるのだからむだなことである。現代の教育の中から教育者がつくり

出したのが労働者という自覚であろう。

しかし、だからといって教育者が、そういう組織の中の一コマをう
ずめる機械のように仕事をさせられる以外に手はないものであろう
か。そこに人間の味わいを出し、人間としての知性を働かす場合はな
いのであろうか。

そうではあるまい。人間はあらゆる環境で次々と新しいものを生み
出してきた。そこに人間性と知性を生かしてきたのである。教育者も、
今や新しい環境の中で、新しく具体的な場でその人間性と知性とを生
かすことを考える以外にないのである。そのみがかをいかす道であ
ろう。それができないということは、教育者が自分のおかれてる現
実を見抜くことができないということであろう。でなければ、自分は
それができないと思っている意識がじゃましているのである。

指導要領にしたがって、教科書を生徒に教える仲介者にすぎないと
いう自己の役目に対する認識の仕事に問題があるのである。そこに
人間性を発揮し、知性を発揮する道がないと思うのは、そこにおける
働き方を考えることができないからである。最初から考えることをし
ないからかも知れない。それは教育という仕事、そこに人間が居り、
それがどうして育っていくかを見抜くことができないからである。そ
うさせているのはそのまわりの環境であるけれども、それを克服でき
ないと考える人間の心の問題である。人間の意識がやはり最後の問
題である。

三

人間味過剰の教師か知的マシンか、などという問は問にならない問
なのではないか。そういう二者択一の問題ではない。少なくとも現代

の問題意識ではない。現代の教師はもつと根本の所で人間性の問題に当面している。知性の問題に当面しているのである。それを忘れてはならないのである。

長い間教師は学級経営の中の王者として振舞ってきた。教師は自分の社会の外から、教材を提供され、それを受けとって教育していた。そういう伝統の中で、いつの間にか、教師は教科書を仲介する機械の如くに位置づけられてきている。そこには教師としての知性を働かす場がなかった。それは教師の人間味を失わせることにもなってしまった。

教師が自ら教材をととのえ、自らの力によって教育を考え組織しなければならぬ時代は、教師はたえず、人間と人間社会に目を開いていなければならないかった。そこから起こってくる教育活動には生命がこもっていた。教師の人間味もそこに生きていた。教師の知性も十分に発揮された。そうでなければ、教育活動そのものが成り立たなかったのである。

ところが、人のつくった組織の中で、学級という形の中にとじこもり、人のつくった教材を使って、人間にふれないで教育だけを考えるようになれば、教育は生命を失ってしまう。子供という対象は、動物園のおりの中の動物でしかない。生きた人間社会から隔離された教材を受けとる動物でしかない。そういう所で教師の人間味は到底発揮されない。教師の知性も発揮される場がない。生き生きと働かないのである。すべてがおりの中の遊びになってしまうのである。

人間味と言おうと、知力と言おうと、すべて観念的なものでしかない。それが結局は、新しい情勢にに応じて、人間の運命を考えることを忘れる所からきている。教師というも、それは昔あった虚像でしかない。それは時代にあわない姿のものである。教育というも、それは形

としてしか考えられていない。生きた人間社会の中で生きている人間の成長の問題としてとらえられていない。それも虚像である。そこで働く教師の人間としての姿には、あるいは人間味を欠くと目にうつるであろうし、知性を欠くと目にうつるであろう。そういう点だけが徒らにクローズアップされれば、人間味とか、知的マシンとかということになる。

人間味とか知性とかは、人間社会の生きた出来事の外に隔離されて学校という壁の中に閉じこもっているのは働かないのである。世間を知らない教師と言われるような人々の中には、人間味とか知力とかは生まれないのである。そういう努力をしても、観念のから回りに終るのである。そういう地盤から生じた観念的問題が、人間味過剰の教師か知的マシンとしての教師か、というような問題ならざる問題であろう。こういうことを論じなければならぬということでは、それ自体教師の自殺行為となるのではないか。出直さなければならぬ時がきているというべきであろう。

教師は今や古い時代の教師観を考え直さなければならぬ時がきているようだ。新しい時代の新しい教育の組織の中で働く、教師集団のあり方を根本的に検討したらよい。教師にかわるものとして、ティーチング・マシンが生まれるということが言われている。そういうことならそれでよい。教師が機械と対決して、自分の方が有能だとか、そうでないとかと争わなければならないのかどうか。ティーチング・マシンによってとってかわられる教師ならば、それはとってかわられたらよいと思う。自分の地位に未練がましくしがみついていることはないのだ。ティーチング・マシンが生まれて、なおも教師が自分を主張するのは、手工業者の陶工が新しい機械に反抗して依然として古い

ものに固執するのと似ているのかも知れない。自動車が生まれたのに人力車夫が反抗するのも知れない。そうでないのならそうでないように、新しい環境の中で新しい教育の人間味と知力の生かし方を考えなければならぬ。現代の教育の中では、教師は人間味も、知性も失っているのではないか。

むすび

昔、孔子が憤を発しては齡を忘れといったが、孔子の教育的な仕事は、彼が世の中の人間の事実を見て、そこに憤を発し、世の中を憂い、そこから年齢を忘れて始まっている。彼は人を見て法を説くことを主張しているが、そこには彼の人を見る知力と人間味が働いている。それは古代の社会における教育者の姿であつたが、現代においても、次代の人間を育てる基本は同様であろう。いつの時代の社会であろうと、そういうものがなければ、その社会は墮落する。現代の社会の墮落した姿に憤を発して、そこから教育者の仕事が始まるのではないか。そこに人間味があり、鋭い知性を働かすことが必然的に生じるのである。墮落した大人と一緒に教育者も墮落している所に人間味も何もありはしないのだ。人間味にしても知性にしても、それは観念ではない。人間の意欲的な行動なのである。泰平ムードの中にあぐらをかいては、知力も人間味も生まれはしないのである。

そういうことが忘れられては、現代教師の問題は視点を失うことになる。

(日本生産性本部プログラム教育研究所)